

カメルーン共和国の日本語教育と日本語学校について

柚原里香

JLIC 日本語学院

1 はじめに

本稿では、2025年7月時点でのカメルーン共和国における日本語教育と日本語学校についての報告である。具体的には、日本語教育の概要、教育機関、最新の動向、課題とその対応、今後について述べる。

2 日本語教育の概要

カメルーン共和国は、日本語教育機関が少ないのが現状である。しかし、日本文化、技術、アニメやマンガなどに興味関心を持ち、日本語を学ぶ若者は増加している。日本語教育の重要性は今後さらに高まると考えられる。カメルーン共和国における日本語教育機関は現時点で2校あり、JHC-JLI 日本語学校と JLIC 日本語学院である。両校は国内における日本語教育の中心的役割を担い、日本語を体系的に学べる教育機関である。

学習者の年齢層は18歳から28歳で、日本への留学、進学、就職を目的とする。学歴は高等学校卒業が50%、専門学校・大学卒業が20%、大学中退が30%である。これは、国内の就職機会が限られる中で日本への留学を将来の可能性として捉える若者が多いことを示している。

しかし、日本語教師の数は限られ、現地には日本語教師会等の組織は存在しない。教育環境は十分とは言えないが、日本語学習への関心は着実に高まってきている。

3 教育機関

3.1 JHC-JLI 日本語学校

JHC-JLI 日本語学校は、2008年に Douala 市に設立された。資金的支援は有瀬直次氏により行われ、設立の契機は、2005年の博覧会で Mr. Nana と出会ったことによる。開校当初は指導者2名、学生数30名であったが、地域に根ざし、教

育成果を上げてきた。しかしコロナ禍により一時的に休校を余儀なくされた。その後再開し、現在も地域における日本語教育の拠点として存続している。

3.2 JLIC 日本語学院

JLIC 日本語学院は、校長、秘書、経理・広報担当、日本人教師 3 名、臨時現地教師 1 名により運営している。社長は日本在住の Mr. Christian であり、日本で働きながら、JLIC 日本語学院を経営している。

本学院の対象者は日本留学を目指す若者である。1 年間で日本語能力試験 (JLPT) N4 レベルの到達を目標としており、年間 4 回の学生受け入れを行う。現在 3 クラスを運営し、各クラス 15~20 名の学習者が在籍する。教材には『みんなの日本語』『みんなの日本語 翻訳・文法解説 フランス語版』『一人で学べる ひらがな かたかな 英語版』『みんなの日本語練習帳』を使用し、授業ではフランス語と英語を補助的に活用している。

学習内容だけでなく、日本文化紹介も取り入れ、将来的な留学や日本社会での生活に備えた教育も行っている。

4 活動と最新の動向

JLIC 日本語学院では、学習活動に加え文化的イベントを積極的に実施している。具体的には、オタク・フェスティバルへの参加、年 2 回のスピーチコンテスト、クリスマス会などである。これらの活動は学習者の日本語使用機会を増やし、仲間との連帯感を育むことで学習モチベーション向上に繋がっている。

近年以下の動向が見られる。

4.1 大使館と JICA との協力体制の強化

スピーチコンテストには大使館、JICA、JICA 海外協力隊の方々を招待し、審査員も務めていただいている。このような関わりにより、教育の信頼性も向上している。さらに、大使館には、留学手続きについてご支援いただいております。大使館や JICA との協力体制は、学習者の支援環境を整備するうえで重要な役割を果たしている。

4.2 日本人との交流機会の増加

留学生、インターン生、文化人との交流が活発化し、オンライン交流会も実施している。これにより学習者は日本語の使用機会を増やし、実践的なコミュニケーション能力を養うことができている。

4.3 学習者の目的意識の変化

従来は日本に行くことが学習の主目的であったが、近年は将来の夢やキャリアを見据えた学習傾向が強まっている。これに応じて、教育内容や指導方法も学習者の目的に合わせた工夫が求められている。

4.4 JLPT の実施交渉

現状、カメルーン共和国では JLPT は実施されていない。JLIC 日本語学院では、JLPT 過去問題を使用して試験を行うことで、学習者のレベルを測定している。今後はオンライン試験の導入も検討している。JLPT 実施に向けた交渉の背景には、導入により学習成果を客観的に評価できること、そして学習意欲の向上が期待できることがある。これらを踏まえ、実施に向けて交渉を進めている。

4.5 分校設置と JLIC 日本語学院の一室に図書館開校計画

Douala 市および Dschang 市における分校設置が数年計画で進められている。分校設置により、教育基盤が拡充されより多くの学習者が日本語教育にアクセスできる環境が整うことが見込まれている。

5 課題とその対応

5.1 学習継続の難しさ

カメルーン共和国では日本語使用機会が限られており、学習者のモチベーション維持が困難である。この課題に対して、JLIC 日本語学院では文化紹介やイベントを積極的に実施し、学習環境を充実させることで、継続的な学習を促している。

5.2 自習習慣の定着不足

授業外での自習習慣が十分に定着していない学習者が多く、そのため学習成果に差が生じやすい。また、留学先の日本語学校からは、カメルーンでオンライン面接を行った時よりも日本語のレベルが低下している学生がいるとの指摘もあり、早急な対応が求められる。

5.3 遅刻、早退、中抜けの多さ

遅刻、早退、中抜けが多いことが教育上の課題となっている。JLIC 日本語学院では日本のルールを導入し、規律意識の向上を図ることでこの問題に対応して

いる。

5.4 日本に行くことが目的となっている

学習者の中には、ご家族の希望で日本への留学が目的となっているケースがまだ多い。そこで、JLIC 日本語学院では、入学時にご家族への情報提供を十分に行うとともに、学習者には日本語を使って何を実現したいかを考えるよう促す工夫をしている。

5.5 日本語教師の不足と現地人教師の育成の必要性

分校設置予定に伴い日本人教師不足が深刻である。また、現地人教師の育成はできていない。日本語教師の募集を行いながら、現地人教師育成の検討をしていきたい。

6 まとめ

本稿では、カメルーン共和国における日本語教育、教育機関、活動、最新動向、課題とその対応、今後について述べてきた。現時点で JLIC 日本語学院の卒業生は 77 名、日本で留学中の学生は 55 名である。停電や通信障害などの困難な環境下でも、携帯のライトを使いながら学習し、夜遅くまで学習室で努力する学生の姿は、日本語教育の重要性を象徴していると考えられる。

今後は、教育機関の拡充と教師育成を進めながら、持続可能な日本語教育の発展が期待される。カメルーン共和国における日本語教育は、学生の夢の実現支援とともに、日本とカメルーン共和国両国の相互理解や人的交流、国際協力基盤の形成にも尽力していきたい。



JLIC 日本語学院校舎



有瀬直次氏(左)と学習者